

トレランは人気、しかし！！

オリエンテーリング普及効果

オリエンティアはトレイルランニングレースではなかなかの好成績を挙げており、日頃の鍛錬の成果を発揮している。

しかし、トレイルランナーにとってオリエンテーリングが必要かどうかというと、疑問である。トレーニングなら近くの山道を走ればよいのであって、わざわざオリエンテーリング大会に行く必要は全くないのである。昨年の三河高原トレイルランでは会場でWOCのビデオを流したが残念ながら見る人はほとんど無く、トレイルランナーはあまりオリエンテーリングに興味を持っていないようである。

三河高原トレイルランニングではオリエンテーリングを勧めるチラシや中日東海ブロック大会にランナーのためのコースを設定し、高価なチラシを作って、PRに努めたが、中日東海ブロック大会のランナーズクラスの参加はたった3名であった。しかし、ランナーズ向けのクラスを設定し、まずまずの参加を得ているジュニアチャンピオンオリエンテーリング大会を主催している多摩OLの菅原琢さんはこの理由を『おそらくは、クラブ員の中のアドベンチャー系の人のツテだと思います。それと、継続性。大会のカラーが「初心者に優しく、でも競技は本格的」ということがなんだかんだ浸透しているのかも知れませんね。最初に「面白い」または「今度こそ」と思ってもらえるように頑張っていることが成功に繋がっているのかも。』と語っている。

見習いたい点である。しかし人脈がなどの点は多くのクラブにとっては厳しそうである。

オリエンテーリングに結びつけるなら、アドベンチャー系の参加があり、ナビ能力も要求されるロゲインのほうに適しているとおっしゃる京都の久保さんやゴールドウインの田口さんの意見には同感する人も少なくないだろう。

ハイカー対応・自然保護・安全

トレイルランに反対をするひとつに登山者がある。

赤城山トレイルランニングレースは美しいつつじが咲くシーズンに行なわれていたが、この時期はおなじくハイカーも多い。走るランナーに多くのハイカーは危険を感じるとともに、景観を損ねると思うこと少なくないと思われる。また、道が荒れると見る人もいるだろう。これに対し、鉾の付いた靴で歩いくハイカーのほうがもっと荒らしていると反論もあるが、実行委員会は賢く今年から2週間早めて、つつじのシーズンを外した。

また、自然保護という点からトレイルランを問題視する団体もあり、コースの変更やコーススタッフの増員などで対応しているが、自然保護団体との連携や団体の集まりに加わることも考えていく必要がある。また、自然保護の観点から大会規模を制限すること必要ではと赤城山トレラン関係者は考えている。

また、ある山岳耐久レースで1昨年コースから滑落して死亡するという事故があった。運営する際にはAEDの準備や消防署と救急体制について打ち合わせるのであるが、実際山道において事故があったら、いくら急いでも現場に到着するには時間がかかるということ承知しておかなければいけない。

一方、スズメバチの事故は9月に頻発しており、今年、京都で開催された登山マラソンでもあった。一昨年は三河高原トレイルランでも蜂の事故があった。事前には全く巣の存在に気づかなかったし、巣のあったお宅の方も日常生活の中では気にならなかったようである。大勢が走ることでスズメバチが警戒し、攻撃態勢をとることがあるので、開催時期は重要である。事前発見に努めるとともに、発生時の対応体制を作っておく必要がある。

地元との共存

毎年秋から春にかけて市町村民のためのマラソン・ジョギング大会を開催する行政が多い。しかし、トレイルランの地元開催は山梨県道志村観光協会が開催するものなどでわずかである。それゆえ、地元の反対に会って、中止になることもある。その事例がアドベンチャーマガジンに紹介されている。

三河高原トレイルランニングレースも実は課題を克服してきた。ひとつは私設の森林作業道の通行。地主は通行を許可する代わりに、作業道の整備を市に要求するというものである。これはWOC2005のときからの継続問題であった。現在のコースの北に国道301号線であり、この国道の北側に問題の作業道がある。市から問題がある301号線の北側は避けて欲しいという要望を受け、第3回より現在の301号線より南側だけを使うコースになった。

また、道ではない尾根筋や沢筋を通行する部分の割合が約20%ある。第2回大会では雨天で表土がむき出しとなったことを地元の方から苦情を受けた。また、斜面を横切る小径も崩れ、マウンテンバイク関係者から苦情を受けた。これに対しては、小道の修復と次回からのレース後の点検実施、道のない急斜面をコースから外すとともに笹などを短く刈り過ぎないようにした。また、誘導テープ・誘導看板のとり忘れや汚れた靴を洗面台で洗ったため、泥で配水管が詰まるなどのトラブルが多発した。テープなどの取り忘れはスタッフの任務の明確化とレース後の点検、洗い場の明確化などを行なった。トレイルランは一般の人が通行しても構わないハイキング道や林道を使うことが多い。しかし道がない部分が多い三河高原トレイルランは気持ちが良いと参加者には好評であるが、地元の方に配慮し、今も参加者が試走することを禁じている。

東山36峰マウンテンマラソンでは、沿道にあるすべての家にお知らせとお詫びのビラを配り、お寺や学校、文化財保存会などに挨拶とお願い文書を提出し、終了後にはお礼に上がるなど手

を尽くして、大会成功につなげている。

また、正木山トレイルランでも、参加者の安全確保、保険申請、警察への届出と怠りない。

オリエンテーリング団体の主催について

赤城山トレランはオリエンテーリング大会実施技術を他のアウトドアスポーツに拡大すること、地元のイベントとして定着を図ること。さらに主催協会の活動資金の充足が主な目的として開催されている。このことは京都の久保さんも大事なことと捉えられ、地図作成など大変な労力を要しながら十分な見返りを感じにくいオリエンテーリングは空しさを感じることもあり、それに固守せず、自らの能力を活かす活動もしたほうがよい。そしてその成果はオリエンテーリングの普及などに活かすことができるとおっしゃっている。

800人とか1000人の定員が申込締切前に埋まってしまうほど反応がよいトレイルランにはオリエンテーリング以上に運営に熱が上がっている愛知県の各クラブ。しかも、愛知県を始めとする東海4県の参加者が大多数ということで、ランニング愛好者の厚い層と熱

い走りに運営者が動かされるのか、100名の運営スタッフは比較的容易に確保できる。

一方、定款や会則で事業を定めているオリエンテーリング団体において、トレイルランニングレースの位置づけ、説明には苦しむ点もあることは事実である。オリエンテーリング関係者の中にも「地図を使わない事業はJOAの事業としてふさわしくない」という人もいる。

トレランのPR方法をオリエンテーリングに

赤城ではカラー刷りの要項を作ってPRしている。三河高原では要項を前回参加者全員に送っているし、プログラムも全員に送付している。オリエンテーリング界でも最近、手にとってみたくなる見栄えのする大会要項が普及にとって重要ではないかといわれている。要項のダイレクトメールは参加してみようという気持ちを引き起こすし、プログラムの事前送付は大会ルールなどの徹底という点で重要である。オリエンテーリングでは電子媒体の普及に伴い、経費の点からトレイルランで行われているこれらのことが行なわれなく

なっている。それによって益々外への発信が少なくなり、オリエンテーリング人口の減少に拍車をかけている。オリエンテーリングを上昇気流にのせるためには必要なことではないだろうか。

スポンサーも豊富

山系のスポーツ店には2万円近い高価なトレイルランシューズが並べられている。また、ランニングに適したウェアやザック類、防寒具などトレイルランニングはスポーツグッズ会社にとって大変嬉しいスポーツである。大会ではスポンサーメリットが大きくアウトドアグッズ会社から賞品を提供していただくことが多いし、会場に出店をしている。しかしオリエンテーリングについては、残念ながら協賛するメリットがないと、協賛会社。オリエンテーリングよりロゲインのほうが、企業メリットがあり、参加者にオリエンテーリングに興味を持たせやすいのではとゴールドウィンのアウトドアスタイル事業本部の田口さんは提言されている。

【あとがき】課題もオリエンテーリングと共通するところが多いが、PRの仕方や参加者へのサービスなどは沈滞するオリエンテーリング復活のために是非取り込みたい。トレイルラン運営で得たものはオリエンテーリングに活かしていきたいし、選手にはトレイルランナーを凌駕する体力・走力を養って、世界のオリエンティアに互角に戦える力をつけて欲しい。

尚、この企画にあたり、ゴールドウィンの田口稔氏、オリエンテーリング関係では久保喜正、船橋昭一、村越真、上田泰正、菅原琢、安斎秀樹、松澤俊行、鳥羽都子、福田良雄の各氏から多数の情報をいただきました。厚く御礼申し上げます。尚、折角いただいた情報ですが、すべて利用できなかったことをお詫びいたします。(小野)



参加者でごった返す赤城山トレラン会場



トレランでも活躍する柳下大（有度山レース）